

第2日目(8月21日) 午前 第1室(E-201) (8) 9:30 (9) 10:00

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(8)	事例	大	ICT	三宅 ひろ子 (昭和女子大学)	英語の入学準備教育における学習支援に関する実践報告	近年の入試形態の多様化に伴い、十分な学力検査を経ずに大学に入学する学生が増えている。旺文社教育情報センター(2015)によると、推薦入試とAO入試による入学者の割合は43.5%であると報告されている。これらの入試区分での入学者は基礎学力が不足している傾向にあり、この問題を入学前に可能な限り解消しておくことが望ましいという認識から、本学では全学共通・入学準備教育として、特に英語の語彙力を強化するための学習(ALC NetAcademy2, PowerWordsコース)を義務付けている。eラーニングを利用することで、学習者の語彙レベル、学習動向、学習に対する姿勢を確認でき、その情報をもとに電話連絡などによる支援をすることができる。取り組みの1年目には、学習修了者がわずか75%に留まったが、期間中の適切設定に工夫をし、サポート体制を強化した2、3年目には、全員が学習を修了した。本発表では、本学での過去3年間の取り組みについて整理する。
(9)	研究	大	ICT	藤井 彰子 (聖心女子大学), 飯野 厚 (法政大学), 大畑 甲太 (フェリス女学院大学), 稲垣 善律 (津田塾大学)	An exploratory study of the effects of video conference sessions on university students' English language learning	In an EFL context, learners often have limited opportunities for authentic interaction in the target language. In recent years, however, online learning has been harnessed to provide language learners with more exposure to the target language (Blake, 2011). In addition to text-based interaction between learners, video conferencing is a more innovative option that also serves as an opportunity for international exchange (e.g. Jauregi & Banados, 2008). However, incorporation of video conferencing into second language courses is still rare. The current paper reports on a case study of one small group of Japanese university students (n=8) engaged in weekly Skype video conference sessions with an English teacher in the Philippines over a period of 10 weeks. Three research goals were addressed in this exploratory study: (1) Did learners' speaking proficiency develop over the 10 week period? (2) Did learners have communication difficulties during the interaction sessions? (3) Was there any positive effect of the international oral interaction sessions on learners' second language learning anxiety and motivation? Learners completed two types of oral proficiency tests at the beginning and end of the 10-week period. The video conference sessions were video recorded. Learners also completed questionnaires and participated in interviews about their reactions to the video conference sessions. Preliminary results indicated qualitative changes to learners' oral proficiency. An analysis of the video conference sessions showed learners struggling to communicate. Learners' reports suggest that the experience had a positive effect on learners' confidence and anxiety and on their identity as English "users."

第2日目(8月21日) 午前 第2室(E-202) (8) 9:30 (9) 10:00

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(8)	研究	小	教員	中村 香恵子(北海道科学大学)	混合研究法による教師認知研究の試み—Joint Displayの活用—	本研究の目的は、外国語活動に取り組んでいる小学校教師の内面の特徴を解明することである。人の内面を探るための質的調査で問題になることは、インタビューや質問紙調査からは本人が無意識にもっている信念や感情までを引き出すことは難しいということにある。本研究においては、グループ討議における発言の中から構成概念を抽出し、そこから得られた結果を質問紙調査による量的データと混合して用いることによって考察した。本発表では、その中の1名の教師に注目し、その分析の過程と結果を紹介する。本研究は質的分析を含むため、結果の提示には多くのスペースが必要となる。その対処法として混合研究法の結果の提示法のひとつであるJoint Display (Creswell, 2015) の活用について提案する。
(9)	研究	大	教員	吉田 真美(京都外国語大学), 相川 真佐夫(京都外国語大学)	指導実践を通して見られる教職志望学生の成長について—小学校英語ボランティア活動におけるケーススタディー	本発表は、発表者が2009年から京都市内の小学校との連携で実施している、小学校英語ボランティア活動への参加学生の成長について、質的な分析により考察するものである。参加者は年8回の活動計画を立て、指導案、教材作成、模擬授業を重ね、月に一度1時間、約10名のチーム体制で臨む。当日の活動は録画され、次回に活かされるべく、内省が行われる。全ての過程で教職担当教員の助言はあるが、基本的には先輩学生と後輩学生の協働で進められる。本活動は教職課程外の任意活動であるが、実地型であるため、その有効性は教職への布石として期待できる。しかしながら、その検証の余地は残されたままとなっている。本発表では、参加学生を対象に行ってきた複数回にわたるインタビューの質的データにより、教職志望の実習生、児童の指導者、活動のメンバーという3つの立場における成長を分析し、実地型活動の有効性の考察と教員養成課程の充実化への提案を行う。

第2日目(8月21日) 午前 第3室(E-205) (8) 9:30 (9) 10:00

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(8)	研究	大	リーディング	中川 弘明(筑波大学大学院生)	議論教示が英語学習者による複数テキストの読解に与える効果	見解の対立する複数のテキストを読解することで、学習者はトピックに関する問題点や解決法などについて理解を深めることができる。しかし、多くの学習者が「複数テキストの情報をどのように整理したらよいか」を把握しておらず、テキスト間の理解に困難が生じている。そこで、本研究ではテキストの論点を客観的に整理するように方向づける「議論教示」を与えることで、学習者の複数テキストの理解が促されるか否かを検証した。実験では、日本人大学生・大学院生が見解の対立する2つのテキストを次のいずれかの条件で読解した: 内容理解条件(読解後に内容理解問題に解答する)、議論教示条件(例. ある薬の効果と副作用を整理し病気の友人に勧める)。各テキストの記憶とテキスト間の理解を比較した結果、議論教示がこれらの理解に与える効果に関し示唆が得られた。この結果から、本発表では複数テキストの理解を促す読解指導への教育的示唆について議論する。
(9)	研究	高	リーディング	田中 真由美(信州大学)	アクション・リサーチによるクリティカル・リーディングのための枠組み構築	英語教育におけるクリティカル・リーディングのための枠組みを構築するために長期的なアクション・リサーチを行った。研究の対象者は後期中等教育段階の日本人英語学習者である。分析のためのデータとして、学習者の発話とドキュメントを主に用いた。学習者以外の視点も取り入れるため、実践に関する現職の高校・大学教員の意見もデータとして使用した。これらのデータのテーマ分析結果と実践者である教師のティーチング・ジャーナルを活用したリフレクションを基に、クリティカル・リーディングのための枠組みを構築した。この枠組みを、テキストの「書き手」、「読み手としての自分」、「その他の読み手」の3つの視点から、テキストを根拠に解釈する「テキスト的解釈」と社会・文化的背景とテキストを関連づける「社会文化的解釈」の2通り解釈を促すキー・クエスチョンで構成した。発表では、構築した枠組みと指導実践について報告する。

第2日目(8月21日) 午前 第4室(E-206) (8) 9:30 (9) 10:00

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(8)	研究	大	リーディング	津波 聡 (沖縄国際大学)	年間多読指導における課題設定の妥当性	本研究は大学の年間多読指導における客観的な最低読書量を明らかにすることを目的に実施した。そのために、10万語を年間最低読書量と設定しその妥当性を検証した。具体的には、以下を研究課題とした。 1) 語数とコミュニケーション能力の伸びに相関はあるのか。2) 10万語達成グループと未達成グループの間にはコミュニケーション能力の伸びに有意差はあるのか。読書量(語数)とプレ・ポストテストの伸び率の分析の結果、両者間に相関があり多読を通して読書量を増やすことができれば英語力向上の可能性が高まるということが本研究でも明らかとなった。また、被験者を10万語達成グループと未達成グループに分け、双方の伸び率を検証した結果、達成グループがより高い確率でポストテストの得点が伸びていることが明らかになった。このような結果から、大学の年間多読指導における10万語という語数は客観的な年間数値目標として妥当性があるという結論に達した。
(9)	研究	その他	リーディング	今村 一博 (神戸市立工業高等専門学校)	英語多読が情意・読解ストラテジーに及ぼす早い段階での影響	本研究では、課外で英語学習に長時間を割けない学習者を対象に、半期末満の期間で多読を行う方法をとった。この条件で成果が得られれば、同様の環境にある多くの指導者及び学習者に有益な知見が得られると考えた。本研究は実験群と統制群を設け、多読の影響を多方面から調査する研究の一部である。高専の初級英語学習者を対象にして、実験群には5か月余り英語多読を課外で実施した。その前後に全員に、①英語及び英語学習に対する態度・動機づけ、②自分の英語の読みに対する認識に関して質問紙調査(6件法)を行った。結果、平均2万2千語余り多読を行い、回答を統計処理したところ、広く英語・英語学習に対して肯定的態度・動機づけを持つようになることがわかった。また、英語を英語のまま理解して読むようになったと認識していることがわかった。多読の影響は情意及び読解方略において、影響が表れる多読の時期(読書量)が異なる可能性が示唆された。

第2日目(8月21日) 午前 第5室(302) (8) 9:30 (9) 10:00

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(8)	研究	大	LA	OTAKI Ayano (静岡大学大学院生), SHIRAHATA Tomohiko (静岡大学)	The Acquisition of Ergative Verbs by Japanese Learners of English	The purpose of this study is to investigate how Japanese learners of English (JLEs) acquire English ergative verbs. Verbs belonging to this category allow both transitive and intransitive usages (Kageyama, 1996). Look at (1a) and (1b), which show usages of one of the ergative verbs, break. Japanese also has ergative verbs although morphologically they are inflected slightly differently from each other: kowa-su (transitive)/ kowareru (intransitive), as an example shown in (1a') and (1b'). (1) (a). John broke the chair. (a'). John-ga isu-o kowa-si-ta. (transitive usage) (b). The chair broke. (b'). Isu-ga kowa-re-ta (intransitive usage). In L2 acquisition, it has long been hypothesized that L1 transfer plays an important role (White, 2003). If this hypothesis is also applicable to the acquisition of ergative verbs, JLEs will have little difficulty acquiring English ergative verbs because of the positive transfer from Japanese. Some studies, however, have reported that L2 learners tend to erroneously reject a grammatical sentence like "The chair broke." They tend to think that the sentence should be changed to "The chair was broken." This presentation also clarifies the influence of properties in the subject nouns. Thus, we will examine JLEs' knowledge of English ergative verb structures. A total of 15 ergative verbs were selected as test items based on the English verbs taught in junior high school English textbooks. 65 university JLE participants took a grammatical judgement task asking them to judge the usage of ergative verbs. The results will be analyzed and provided in the 2-page conference abstract.
(9)	研究	その他	LA	高橋 俊章 (山口大学)	冠詞選択が出来なかった原因に関する質的分析の結果について	前回の研究では、冠詞選択問題を用いた調査と冠詞選択に関係する要因(可算性、一般性、定性など)に関する質問調査を20名の調査協力者を対象に実施し、どのようなプロセスで冠詞の選択が行われているか調査した。先行研究で提案されている主要な冠詞選択のモデルを対象に、冠詞選択問題とそれに関する質問調査によって得られたデータを最も確に説明できる冠詞選択のプロセス・モデルをパス解析(AMOS使用)や決定木分析(R使用)を用いて分析した結果、日本人英語学習者の冠詞選択プロセスが、Master(1990)によって提案されたモデルと最も一致することを示した。今回の研究では、日本人英語学習者が用いている冠詞選択プロセスのモデル(Master(1990)のモデル)に基づき、H27年度の調査データを質的に分析し、冠詞選択のモデルを適用して冠詞選択を行う上で、調査協力者が何を困難にしていたのかについて考察を行う。

第2日目(8月21日) 午前 第6室(304) (8) 9:30 (9) 10:00

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(8)	研究	大	LA	高波 幸代(東洋大学)	スペリングエラーの質的分析—テスト形式の比較に焦点を当てて—	英語を母語とする国々では、読み書き能力を向上させる一環として、スペリング習得に焦点を当てた取り組みが広く行われてきた。日本人英語教師や日本人英語学習者の間では「正しい綴り(スペリング)を書けることは、単語の発音や意味が分かることと比較して、それほど重要か?」と問われることも多い。単語の基本的な構成要素、「音声」「綴り」「意味」のうち、綴りだけがそのように扱われている。日本人英語学習者(大学生)を対象とした先行研究(Takanami, 2014;高波, 2015)では、既習単語の綴りを正しく書けない学習者の存在が観察されている。高校卒業時まで学習した100語を対象とした調査の結果、「発音と意味は分かるが、綴りを書けない」という学習者(R+S-C+)が約半数も存在していたのである。本研究では、個々の単語の特徴に注目してスペリングエラーの質的分析を行い、「音声→綴り」「意味→綴り」の2つのテスト形式の結果を比較しながら、詳細を報告する。
(9)	研究	中	LA	姉崎 達夫 (新潟県長岡市立関原中学校)	単語認識における形態処理・音韻処理—3種類の文字を用いて—	学習者がより高いレベルに進むためにはボトムアップ処理の自動化が欠かせない。本研究では、単語認識の形態処理、音韻処理に着目し、ひらがな、英語、ハングル文字を用いて、中学生の読解力に関連が強いと考えられる処理について調べたい。研究課題は、日本人中学生の上位群と下位群では、視覚提示された語の形態処理と音韻処理の反応時間や正答率にどのような違いがあるか、である。参加者は中学1年生である。コンピュータ教室のパーソナルコンピュータを使用する。画面上で、二者択一形式の遅延マッチング課題を与える。提示項目は、ひらがな(疑似単語)、英語(疑似単語)、ハングル文字の3種類である。分析は、分散分析を用いる。

第2日目(8月21日) 午前 第7室(306) (8) 9:30 (9) 10:00

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(8)	事例	大	スピーキング	佐々木 緑(大和大学)	TOEFLを利用したスピーキングの授業—自律学習者の養成を目指して—	本発表は、大学1年生を対象に、スピーキング指導を通して自立学習者になるためのストラテジーを修得させることを目的におこなった授業実践と効果についての事例報告である。「授業を実際のコミュニケーションの場とするため、授業は英語で行う」ことが唱われた新学習指導要領のもと高等学校で授業を受けた学生が大学に入学してきた。しかしながら、佐々木&齊藤(2016)によると学生の高等学校での英語学習は改定前とあまり変わらない。本授業の履修者に行った事前調査でも、英語運用能力を養成するための参加型の活動はほとんどなかったことがわかった。スピーキング能力を向上させるためには、授業時間内だけでは不十分であり、自ら授業外でも話す機会を作ろうとする自立学習者としての態度が必須である。本授業では、TOEFLスピーキングテストを用い、話す練習に有効なスキルを教えながら、授業内外で協働学習が促進されるような活動を取り入れた。
(9)	研究	大	スピーキング	伊達 正起(福井大学)	タスク繰り返しと形式指導を使った練習の効果—形式指導のタイミングの影響に関して—	発表では、大学生に対するタスク繰り返しと形式指導を使った練習が、学習者が練習後に遂行する発話タスクのパフォーマンスにもたらす効果について報告する。実験群は、練習時にタスクを繰り返す際、2回目のタスク遂行前に形式指導を受けるグループ(T1-F-T2)と最初に形式指導を受けた後でタスクを繰り返すグループ(F-T1-T2)から構成した。そして、練習を受けない統制群を含めて、一連の練習セッションの前後に遂行した同じ物語タスクのパフォーマンスが参加者内及び参加者間でどう異なるのか比較した。その結果、実験群の発話の流暢さが向上し、さらにT1-F-T2の方がF-T1-T2よりも流暢であった。一方、F-T1-T2のみが正確さが向上し、統制群よりも正確であった。このことから、タスク繰り返しと形式指導を使った練習の効果、及び形式指導のタイミングの影響が示唆される。

第2日目(8月21日) 午前 第8室(E-308) (8) 9:30 (9) 10:00

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(8)	研究	大	テストニング	飯村 英樹(熊本県立大学)	錯乱肢の分析—リスニングテストの場合—	<p>多肢選択式テストの作成において重要かつ困難な作業の1つは、魅力のある(受験者を引き付ける)誤答(錯乱肢)を複数作り出すことである。本研究は、多肢選択式リスニングテストにおいて、どのような錯乱肢が魅力的で、どのような錯乱肢が魅力的でないのかを実証的に検討する。使用するデータは、日本人大学生約160名が受験したTOEICのリスニング問題である。まずテストデータに対して項目分析を実施し、正答率によって錯乱肢の選ばれ方に違いがあるのかを検証する。次に項目毎に各錯乱肢の占有率を割り出し、魅力のある錯乱肢とそうでない錯乱肢に分け、それぞれにどのような特徴が見られるのかを質的に分析する。以上のことから、多肢選択式リスニングテストの錯乱肢作成における注意点を整理する。</p>
(9)	研究	大	テストニング	Yasuko Ito(神田外語大学), Yuji Nakamura(慶應義塾大学), Adam Murray(宮崎国際大学), Taiko Tsuchihira(聖徳大学)	Perceptions of integrated-skills assessment by in-service and pre-service teachers	<p>The integration of different skills is a key element in MEXT's Course of Study. While educators and teacher trainers emphasize integrated-skills teaching, they do not necessarily consider assessment from an integrated-skills perspective. This can create a detrimental mismatch between teaching and assessment. The purpose of this study is to examine to what extent pre-service and in-service teachers understand the need for integrated-skills assessment and to what degree such assessment is taken into consideration in classroom teaching. The study consisted of two phases: (1) collecting responses from our workshop participants (pre-service teachers), and (2) comparing them with those of in-service teachers from our previous survey (Nakamura et al., 2014) and the responses from pre-service teachers. We offer an annual workshop on integrated-skills teaching and testing to university students who are enrolled in teacher training courses, i.e., pre-service teachers. We have had a total of 58 participants in the previous five workshops, and the post-workshop questionnaire revealed that the participants had an improved understanding of integrated-skills assessment. In-service teachers agreed that integrated-skills teaching will improve English education, although it is not regularly implemented in their classes (Nakamura et al., 2014). Also, they perceived integrated-skills assessment as being very difficult to employ. The pre-service teachers have a positive attitude toward the integrated-skills teaching and assessment, but they have various concerns about assessment. In the presentation, we will discuss the findings based on the responses from the summer workshop participants and the survey results. Also, we will make suggestions for teacher training.</p>



第2日目(8月21日) 午前 第9室(E-311) (8) 9:30 (9) 10:00

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(8)	研究	高校	ライティング	Nobuhiro Kamiya (群馬県立女子大学)	Unintentional written code-switching from L1 to L2: Comparing vocabulary between intra- and inter-sentential code-switching	Despite the fact that oral code-switching has been extensively investigated in past studies, written code-switching has attracted relatively scant attention of scholars although it is common practice among bilinguals. The present study analyzed a personal diary written by a senior high school student while studying abroad in the U.S. for a year. Throughout the year, his writings exhibited code-switching within a sentence (intra-sentential) and across sentences (inter-sentential) from his L1 (Japanese) into his L2 (English). In order to examine whether the two major theoretical frameworks adopted for oral code-switching, namely, the Matrix Language Frame model and the cascaded activation model, can also be applied to the written mode, vocabulary was compared between intra- and inter-sentential code-switching from multiple perspectives. The results indicate that the selection of words to be intra-sentential code-switched without intention can be explained under the two aforementioned models in the sense that (a) content words, especially nouns, were most frequently code-switched, (b) the degree of assimilation into Japanese of the phonetically transcribed words from English determines the likelihood of code-switching, and (c) most verbs appeared as their bare infinitive forms either followed by the Japanese tense marker or on their own. Furthermore, whereas the amount of intra-sentential code-switching has accumulated as the writer's English proficiency increased, inter-sentential code-switching was prompted by his affective upsurges. The results demonstrate the possibility to facilitate acquisition of a different genre of vocabulary when learners' L1 is utilized in writing tasks than when only the target language is used exclusively.
(9)	研究	大学	ライティング	Shin'ichiro ISHIKAWA (神戸大学)	Grammatical and Contextual Correctness in L2 Writing: An Analysis of the ICNALE-Proofread, A Newly Designed Parallel Corpus Including Learners' Original and Edited Essays	To which extent are L2 English essays written by Asian college students grammatically and contextually correct? What kind of deviance is observed? In the current study, using the ICNALE-Proofread, a newly designed parallel corpus including both of the original essays by Asian learners and the edited essays by professional proof-readers, we aim to examine how the essays by Japanese, Chinese, and Korean learners of English are edited quantitatively and qualitatively by the experts. Concerning the quantity, we adopt the concept of edit distance and investigate the total number of editing processes such as insertion, deletion, and substitution, while concerning the quality, we pay attention to the lexis, both of single words and n-grams, inserted or deleted. Preliminary analysis of the sample data has shown that the average edit distances between the original and edited texts are 41.0, 96.3, and 76.5 for Japanese, Chinese, and Korean learners respectively. The analysis also shows that the distance decreases in proportion to the advancement in proficiency levels for Japanese learners, while it often increases for Chinese and Korean learners, which might suggest that advanced Japanese learners tend to put a greater emphasis on grammatical accuracy, but the other learners rather on fluency and richness in contents.

第2日目(8月21日) 午前 第11室(315) (8) 9:30 (9) 10:00

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(8)	研究	大	音声	江 婉 (広島大学大学院生)	中国人学習者の英語イントネーション使用への意識と産出について	これまで、中国のイントネーションに関する先行研究では、英語イントネーションと中国語のイントネーションを比較し、英語のイントネーションを使用する上での問題点を明らかにする研究も多かった。これらの研究により、中国人学習者の英語使用におけるトーンの抑揚・アクセント・イントネーション句の分割に問題が見られた。しかし、ほとんどの研究がスクリプトの音読による分析であり、イントネーションの使用と発話の意図を分離していた。本研究は、日本の大学に在籍している中国人大学生を対象に(1)1分間の英語によるフリートーク、(2)イントネーションの知識についての質問、(3)スクリプトの音読、(4)イントネーション使用における意識調査を通して、イントネーションの使用と発話の意図の関係性を明らかにする。
(9)	事例	その他	音声	磯田 貴道 (立命館大学), 大和 知史 (神戸大学)	プロソディ指導に組み込みたい 音節・強勢の指導—教科書本文 を利用して	コミュニケーションにおけるプロソディの重要性は認識されているが、その複雑な事象ゆえ、どう捉えるとよいかについて十分な理解に至っておらず、またそれを指導に活用するに至っていないのが現状ではないであろうか。語彙の導入から、音読指導やシャドーイングなど、英語を声に出す作業は積極的に行っているが、英語らしい発音のために、基礎として音節をきちんと把握すること、その上で複数音節の強弱をつけるといったプロソディにまでは気がまわっていないということも多い。そこで、本事例報告では、プロソディの指導に資するポイントとして3つの原則を提案し、その中でも、特に音節の認識と複数音節間の強弱に意識を向ける活動に注目する。それらの活動は、投げ込みではなく、平生の授業で活用できるよう教科書本文を土台とした活動ができるかについて提案をし、活動事例を紹介したい。

第2日目(8月21日) 午前 第12室(314) (8) 9:30 (9) 10:00

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(8)	研究	大	文法	Wu Lan (山形大学)	An analysis of Japanese English learners' excessive use of "be" verbs	<p>Japanese English learners often overuse "be" verbs and make following errors. Some researchers have indicated that this phenomenon should not be attributed to language transfer since the excessive use of "be" verbs is also observed in the English speech of native speakers of other languages, like Chinese and German. However, the Japanese overuse of "be" verbs has its own distinctive features. Some errors are due to the misuse of a part of speech as in (1) taking "be" as Japanese "ga" or "wa". Some are caused by calque, "translating" the Japanese indirect passives into English as in (2). Japanese indirect passives are usually used to indicate that somebody is adversely affected by an event. Due to the influence of Japanese indirect passives, Japanese learners subconsciously use the "indirect passives" in English sentences as in (3) to show the adverse effect of the event. Note that the use of the "indirect passives" in (3) is not because of a direct translation, but rather a subconscious overuse of the structure. Therefore we can conclude that Japanese English learners' excessive use of "be" verbs does involve language transfer, either directly or indirectly. (1) misuse of a part of speech: "be" = Japanese "ga"/"wa"(a) * I wonder what was happened. (b) Nani ga okotta no ka na. (2) loan translation of Japanese "indirect passives"(a) * He was stolen his ship. (b) Kare wa fune wo nusumareta. (3) subconscious use of "indirect passives"* One day, he is received a request by Saito.</p>
(9)	研究	高	指導法	板垣 信哉 (宮城教育大学)	英文書写と内容要約からの英語学習—アウトプット処理とインプット処理の比較—	<p>英語の基礎基本の指導として、英文の書写と内容要約の活動が考えられる。これらは基本的な言語活動と言えるが、その実証的研究は多くはない。本研究は、英語力の異なる大学生二つの群に、目標構文を受動態とする英文の書写課題と内容要約課題を課した。課題後の構文再生結果は、英語力の高い群は、書写活動が効果的で、低い群は要約が効果的であった。但し、実験は試行的なものである。</p>

第2日目(8月21日) 午前 第13室(303) (8) 9:30 (9) 10:00

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(8)	研究	中	語彙	森田 光宏(広島大学), 田頭 憲二(東京家政大学)	中学検定教科書を用いた接頭辞・接尾辞データベース構築の試み	語彙知識の重要な側面の一つに、接頭辞や接尾辞などの語の構成要素の知識がある。これらの構成要素がどのように組み合わせたり派生語ができていくのかを知ることで、学習者は、より多くの語彙を効率的に覚えることや未知語に出会った時にその意味を推測することなどが可能となる。本研究では、中学校課程の3年間英語を学ぶ中で、学習者がどのような接頭辞と接尾辞に触れることになるのかを明らかにするため、検定教科書において用いられる派生語を分析することで、基礎的データベースを構築した。また、構築したデータベースを量的に分析し、(1)中学校の検定教科書では、どのような接頭辞及び接尾辞が現れているのか、(2)平成18年度～平成24年度に用いられた検定教科書と平成24年度～平成27年度で用いられている教科書では、扱われている接頭辞・接尾辞の種類に違いがあるのかの2点を明らかにする。
(9)	研究	高	語彙	中川 右也 (鈴鹿中学校・高等学校)	明示的句動詞習得方法とその効果—認知言語学の理論を援用した試み—	本研究では、英語学習者が苦手とする句動詞習得に焦点を当て、明示的な説明を与えた場合、暗記型と比べ、どのような効果が予想されるのかについて示したい。具体的には、認知言語学で用いられる、イメージ・スキーマを援用したイラスト、又は動画を学習者に提示し、意味の有縁性に着目させ、定着率の向上を試みるものである。意味の有縁性に着目させることは、類義表現を明確化できるだけでなく、文法・語法を理解しやすくなることにも繋がる。また、ニュアンスを正確に捉えさせる効果も期待できる。句動詞習得を困難にしている一つは、句動詞全体の意味が、動詞や不変化詞といった部分の総和にはならないというゲシュタルトが要因と考えられているが、意味の有縁性に着目させることによって、その要因による負担を軽減できる。さらに、考えさせながら習得することから、学習者の自律性を引き出す授業展開が可能となる。

第2日目(8月21日) 午前 第14室(305) (8) 9:30 (9) 10:00

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(8)	研究	大学	語彙	天海 有加 (筑波大学大学院生)	スピーキングタスクを通じた語彙学習—タスク中の発話に基づく検証—	アウトプットを通じた付随的語彙学習において、タスク中の目標語(未知語)の使用(例:意味交渉の有無等)はタスク後に学習した語彙知識のレベル(受容/発表)に影響しているとされる。しかし、先行研究では、open-endタスク(例:意見交換)を用いた検証は少ない。したがって本研究では、大学生がスピーキングタスク(学園祭で販売する商品の価格をグループで設定・目標語の使用は任意)に取り組み、タスク中の目標語の使用がタスク後の知識の学習に与える影響について調べた。タスク中の発話は全て録音され、タスク前後には語知識スケールで目標語の知識を測定した。結果より、タスク中で使用された語のうちいくつかは受容的な知識を得ることができた。さらに、他人の目標語使用を聞くことで目標語を学習できた例が見られ、実際に単語を使用するだけでなく、聞くことによっても語彙知識を獲得できる可能性が示唆された。
(9)	研究	大学	語彙	佐藤 剛 (弘前大学)	初級英語学習者用の語彙サイズテストの開発—試行テストの結果分析・ID分析を通して—	学習者の語彙の広さを測定する、語彙サイズテストは、様々なタイプが開発されている。しかし、成人学習者を対象としている語彙サイズテストは日本の初級学習者である中学生に適応しているとは言い難い。本研究は、初級英語学習者用の語彙サイズテストの開発を目的とする。検定教科書6社をもとに1324語からなる独自の語彙リストを開発し、出現頻度200語ごとに区切り、そこからそれぞれランダムに27問を出題するマクロをエクセルで作成した。これまで、様々な形で試行テストを繰り返し、その妥当性・信頼性の検証を行ってきた。その集大成ともいえる本研究では、6つのすべてのレベルのテスト、それぞれ3つのフォームを中学生73名に実施した。その結果、フォーム間に有意な差は見られず、レベル間には有意な差が見られたことから、開発したテストはランダムに語彙を抽出しても、難易度に差はなく使用できるものであること、レベル分けの妥当性が実証された。

第2日目(8月21日) 午前 第15室(309) (8) 9:30 (9) 10:00

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(8)	研究	小	早期英語教育	及川 賢 (埼玉大学)	小・中学校間での英語の好き・嫌いの変化及びその理由	本研究は小学校の児童が中学校へと進む過程の中で英語に対する好き・嫌いの割合がどのようにの変化するかを明らかにするとともに、その変化の理由を分析する。「小学校では英語(外国語活動)が好きだったのに中学校に入り、歌やゲームがなくなり、英語の授業が文法中心となったため、嫌いになった」という生徒の存在が指摘されることがあるが、その言説がどの程度正しいかを検証する。検証方法は、中学校2年生を対象にしたアンケートの実施とその分析である。アンケートでは、初めに、彼らに小学校6年時に外国語活動の授業が好きだったかどうか、中学1年時に英語の授業が好きだったかどうかを尋ね、その結果から、「小→中」の変化を「好き→好き」「好き→嫌い」「嫌い→好き」「嫌い→嫌い」の4グループに分類する。さらに、グループごとにどういった理由で好き・嫌いが変化したのか、あるいは持続したのかを明らかにする。
(9)	研究	小	早期英語教育	藤井 伸子 (兵庫教育大学大学院生)	外国語活動におけるインプロを通じた学び—児童の相互行為から創造される意味—	本研究は、演劇をはじめとした芸術分野のみならず企業研修、教育等で幅広く行われているインプロ(即興演劇)を外国語活動取り入れることにより、パフォーマンスするなかで児童の相互行為から創造される意味について分析することにより、言語獲得に重点を置いた「認知」と「情動」の分断された「学び」から、それらをつなぐ新たな「学び」を捉え直すことを目的としている。5年生63名を対象としてインプロの授業を実施し、会話分析の手法で質的に分析を行ったところ、インプロのsyntax(基本線)から逸脱したところで、将来変容する可能性を秘め、人の助けがなくても一人で出来るようになることにつながる「創造的な模倣」が見られ、ペアとなって活動している子ども達が、言葉も身体も一体となって学ぶ姿があり、「即興的に学ぶ時、学ぶ人と教える人、学ばれることのあいだには何の分断もない(ホルツマン2009)」ことを見て取る事ができた。

第2日目(8月21日) 午前 第16室(310) (8) 9:30 (9) 10:00

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(8)	事例	小	早期英語教育	土屋 佳雅里 (東京女子大学大学院生)	外国語活動における【言語と文化に関する気付き】を深める指導— Hi, friends! 2の授業実践から—	本発表は、外国語活動における【言語と文化に関する気付き】を深める指導の実践報告である。2020年に全面実施される新学習指導要領では、外国語活動が3・4学年に新たに必修化、5・6学年に教科化されるなど大きな局面を迎える。その準備として、「指導の根幹である現学習指導要領や評価基準を再検討し、指導の枝葉となる指導実践を再検討することは大切である。【言語と文化に関する気付き】の指導は、現行の目標3本柱のうち「言語と文化について体験的に理解を深める」ことが第一に掲げられており、要度は高いとみなされる。そこで、【言語と文化に関する気付き】を深める方策について、「無理がなく現場の実態に沿った指導」を念頭に置き、モジュール活動への可能性も踏まえつつ、15分完結型の活動実践を試みた。質問紙を用いた事前事後の児童調査や各回の振り返り調査などを紹介しながら、【言語と文化に関する気付き】の大切さについて考えたい。
(9)	事例	小	早期英語教育	白土 厚子 (津田塾大学)	プロジェクト重視の英語活動導入 による実践者集団の協働—活動 理論の視点から—	本発表は5年間の小学校へのProject-Based Approach (PBA)に基づくプロジェクト重視の英語活動導入の取り組みを活動理論の視点から可視化しようとする試みである。教師と児童の振り返りやアンケート等から5つの時期で実践の過程を分析し、実践者集団の変容を「活動システム」をモデルに考察する。「活動システム」とは、エンゲストローム(1999)らによって学校教育を中心とした協働性を持つ集団の活動を「活動理論(Activity Theory)」によって説明しようとするものである。また、PBA教室で児童たちは自分たちで選択・決定する機会を与えられる一方、プロジェクト達成のために教師の支援も必要となる。現場の教師は、児童の認知レベルや学習スタイル、他教科での学習状況などを理解しているので、個々の児童に適した支援を期待される(Fried-Booth, 2002)。これらの理論を基に実践者集団の変容の過程から教育的示唆を探る。

第2日目(8月21日) 午前 第17室(501) (8) 9:30 (9) 10:00

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(8)	研究	中	教員	高木 亜希子(青山学院大学), 加藤 由美子(ベネッセ教育総合研究所), 福本 優美子(ベネッセ教育総合研究所)	中高の英語指導に関する実態調査—指導に関する教員の意識に焦点を当てて—	本発表では、全国の中高の英語教員(3,935名)及び校長(1,151名)を対象に、ベネッセ教育総合研究所が実施した、「中高の英語指導に関する実態調査2015」の結果を報告する。本調査の目的は、中学と高校における英語教育の実態と英語教員の意識について明らかにすることであった。調査項目は多岐にわたるが、本発表では、希望する研修、現在行っている自己研鑽、授業で大切にしていること、指導に影響を与えているもの、指導上の悩みなど、「指導に関する教員の意識」に焦点を当てる。本調査結果を、2014年度に実施した教員聞き取り調査結果と比較してみると、「指導に影響を与えているもの」の上位に挙げられた4項目は、聞き取り調査で浮かび上がった5つのキーワード(「子どもに寄り添う」「自らの成長」「最善を求め続ける」「英語を使う経験」「変化」とつながりがあり、質的研究と量的研究の結果の関連性についても示唆が得られた。
(9)	研究	中	教員	酒井 英樹(信州大学), 工藤 洋路(玉川大学), 福本 優美子(ベネッセ教育総合研究所)	中高の英語指導に関する実態調査—教職経験年数の違いによる指導実態と意識の違い—	本発表はベネッセ教育総合研究所が実施した「中高の英語指導に関する実態調査2015」の結果を報告するものである。2015年8月～9月、全国の中学校・高校の校長および英語教員を対象に郵送法による自記式質問紙調査を実施し、中学校校長 717名、中学校教員1,801名、高等学校校長 435名、高等学校教員 2,134名から回答を得た。これらの回答のうち、教職経験年数の違いに焦点を当てて、中学校教員と高等学校教員の回答を分析し、指導方法・活動内容、英語使用の割合、活動の重要性の認識とその活動の実践の実態などについて教職経験年数ごとの回答傾向を報告する。



第2日目(8月21日) 午前 第18室(502) (8) 9:30 (9) 10:00

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(8)	研究	中	指導法	巽 徹(岐阜大学)	英語授業の3R's— 中学校教科書を繰り返し活用する工夫 —	多くの英語指導場面を思い起こしてみると、教材の再利用や活動のリサイクルなどは、あまり行われていない実態があることに気づく。たとえば、中学1年生の学習を終えた生徒が、2年生、3年生に進級した後に、再び中学1年生の教科書を開いて学習する姿はあまり見かけない。中学、高校の英語教育を通して、生徒と教材との出会いは「一期一会」の状態であると言える。多くの指導者は、一度使った教材を再び使用することに違和感がある。既習の教材を再び使うことで学習する側の新鮮さが失われたり、その結果、生徒が興味を失ったりするのではないかという恐れがあるからである。本発表では、教材の再利用(Reuse)や同一教材を再利用する際に活動を生まれ変わらせる工夫(Recycle)、さらには、学習者にとっての学びの抵抗感を減らす方策(Reduce)(「英語授業の3R's」)により、生徒が英語を定着させ、学びを深めるためにどのような実践が可能か、具体的な教材を用いて提案する。
(9)	事例	高	指導法	米崎 里(甲南女子大学), 川見 和子(帝塚山中・高等学校), 米崎啓和(近畿大学)	スピーキング指導の一環としてのQ&A活動が学習者にどのような影響を与えるか—なりきりQ&Aを通して—	発問は教室内でのインターアクションを助長し言語材料の定着を強化してくれる(伊東, 1989)。またコミュニケーションという観点からいえば、生徒自身が質問を作り、それを発問するという行為を促すことは重要とされる(田中, 2009)。生徒が教師に対して、あるいは他の生徒に対して発問しそれに答える形にするなら、英語の発問・応答に必要とされる様々な英語スキルの育成につながる。本研究は様々なQ&A活動の中で、学習したテキストの内容に関して登場人物になりきって教師や生徒からの質問に答える活動、なりきりQ&Aに着目し、それをスピーキング指導の一環として高校1年の男子生徒に対して1学期間実施した。本発表では、なりきりQ&A活動を実施する中、生徒が作った発問および応答が質的、量的にどのような変化が見られたか、また登場人物になりきって応答するスピーキングテストにおいて生徒のスピーキング力にどのような変化が見られたかを分析報告する。

第2日目(8月21日) 午前 第19室(503) (8) 9:30 (9) 10:00

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(8)	事例	高	リーディング	川北 直子(宮崎県立看護大学)	多読を土台とする創造的発展学習の試み—中高生の多読力・知識・考える力を活用して—	地域の幼児から中学・高校生までを対象にした、多読学習を中心とした週末英語活動プログラムを本実践の背景とする。本実践の目的は、①多読学習の成果を学習者に実感させ、②英語読書力を土台とした言語・内容統合型学習、創造的協働学習の試みにより学習者の関心を高めることである。参加者は、自立して英語読書ができるようになった中学・高校生7名である。今回は「宇宙・惑星」をテーマとし、以下の手順で学習を進めた。1) 地球を含む各惑星の特徴や環境についての本を読み、得られた情報から自分の知らなかった事実を取り出し、共有する。2) 宇宙環境で試してみたいと思う実験やアイデアを参加者同士で自由に話し合う。3) 「私が宇宙・地球環境のために将来取り組みたいこと、もし宇宙飛行・惑星訪問が可能ならやってみたい実験」を含むスピーチ原稿を作成する。本報告では、学習過程の振り返りとスピーチの内容から、成果と課題を分析する。
(9)	事例	大	リーディング	山中 純子(愛知学院大学), 種村 俊介(金城学院大学)	多読行動を促進する指導—ホームランブックというキーワードを用いて—	L1において、自発的な読書は読解力、語彙力、スペル力、作文力、高度な文法力を伸ばす源であると言われている(Krashen, 1993; Elly, 1998)。また、児童にとって読書をする事自体が読書の動機づけとなっていることが報告されている。さらにTrelease(2001)は、「一回のとても肯定的な読書体験：一冊のホームランブックとの出会いが子供を読書好きにし、その後の読書行動を促進する」と述べている。L2リーディングにおいてもこの主張は当てはまるのであろうか。多読の授業を通して学習者が「ホームランブック」に出会うと、多読行動がより促進されるのであろうか。本実践では、大学3年生を対象にした多読の授業において、「ホームランブック」というキーワードを用いた指導を行い、学習者の読書行動や読書量との関連を調査した。発表では具体的な指導方法を報告し、「ホームランブック」との出会いが多読行動といかに関連するかを考察する。

第2日目(8月21日) 午前 第20室(505) (8) 9:30 (9) 10:00

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(8)	研究	大	語彙	中條 清美(日本大学), 若松 弘子 (茨城工業高等専門学校), 濱田 彰 (日本大学)	データ駆動型英語学習支援システムSCoRE第三次開発版の公開	本発表では, Sentence Corpus of Remedial English (SCoRE)の主機能と使用例を紹介する。SCoREは様々な難易度の教育用例文コーパスを搭載したData-Driven Learning(データ駆動型学習)を可能にする主に英語初級学習者を対象とした英語学習支援システムである。第三次開発版は(1)英語母語話者が教育的基準に配慮しつつ作成した簡潔で自然な10,000文の英文と日本語訳が利用できる, (2)文法項目別, キーワード別, 初・中・上級レベル別に検索・ダウンロードできる, (3)検索語を中央に配置させ, 複数の例文を提示できる, (4)文法項目やレベル別に空所補充問題を作成できる。これらの機能を持つSCoREは英語教師と学習者のための有用なコーパスツールといえよう。本システムは <a href="http://score-corpus.org">http://score-corpus.org</a> よりアクセス可能で, 誰でも自由に無料で利用できる。
(9)	研究	大	指導法	Iwata, Akira (北海道武蔵女子短期大学)	The Effects of Self-generated Elaboration on Vocabulary Learning	We all know that knowledge of vocabulary plays a crucial role in becoming a proficient user of the target language. However, it is widely recognized that very little support is offered to students on how to build vocabulary in classrooms in Japan. The predominant vocabulary teaching style is currently to let the students learn by themselves using the second language (L2) to the first language (L1) vocabulary lists. In order to seek other measures to facilitate the effective learning of new vocabulary items, I aim to examine different levels of processing, especially that of self-generated elaboration, as one of the possible measures to be adopted. The participants were assigned to one of the following two groups: elaboration and list. Both groups were handed the common L2—L1 list handout, which included the ten target English vocabulary items on the left and their Japanese equivalents on the right. The list group was told to learn the target ten vocabulary items using the handout. In contrast, the elaboration group was handed another sheet, on which there were ten short sentences with ten target words, and required to imagine the situation and produce a reason for each proposition in Japanese. In the posttest, the participants were asked to silently read a text, and tackle the comprehension questions. The results of the test were compared.

第2日目(8月21日) 午前 第21室(507) (8) 9:30 (9) 10:00

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(8)	研究	高	学習者	藤居 真路 (広島県立尾道商業高等学校)	EFLにおいて楽観主義と悲観主義は学習不安とどのように関係しているのか	楽観的な考え方は、実りある充実した生き方に繋がりが幸福となれる考え方の1つとして注目されている(鳥井, 2009; Seligman, 2011)。楽観主義(Tiger, 1979)は、気持ち(mood)や心的態度(attitude)の1つとして捉えられてきたが、目標や期待、帰属理論といった認知的特性の1つとして捉えられるようになってきた(Peterson, 2000)。英語教育では、楽観主義が、英語学習における学習不安とどのような関係にあるのか十分に検討がなされてこなかった。そこで本研究では、藤居(2016)が構成した楽観主義尺度と悲観主義尺度とを用いて、英語学習不安に関する5尺度(Fujii, 2012)との関係を調べたい。また、そのことを通して、教育現場で楽観主義の考え方を学習者に持たせることの英語教育への影響について考察をしていきたい。
(9)	事例	中	学習者	末森 咲(お茶の水女子大学大学院生), 中島 義和(お茶の水女子大学附属中学校)	動機づけ、意欲を高める授業実践の試み—コミュニケーションピックとしての「日本」に注目して—	日本のように英語を使用する機会が少ない環境では、学習者は英語学習に膨大な時間を費やす必要がある。しかし学習を継続することは容易ではなく、いかにして動機づけを維持させるかが重要である。Dornyei(2005, 2009)によると、学習者自身が、どのように将来英語を使用したいか、具体的にイメージすることが特に重要だと言われている。本発表では、コミュニケーションピックとしての「日本」に焦点を置いて実施した英語の授業に基づいた上で、このような授業を行うことがいかに生徒の動機づけ、意欲に影響を与えるか報告する。2014年度に中学2年生を対象に、16の実践を行った。知る、考える、発信するというサイクルに基づく課題解決型授業を実施することで、生徒の動機、意欲が高まる様子が見られた。実践を通して得られた知見をもとに、学習者の主体的学習を促すために、授業内で取り入れることができる活動を紹介する。

第2日目(8月21日) 午前 第22室(515) (8) 9:30 (9) 10:00

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(8)	研究	大	指導法	三熊 祥文(広島工業大学), 岩井 千秋(広島市立大学), 三宅 美鈴(広島国際大学), 二五 義博(海上保安大学校)	英語のオーラル・プレゼンテーション活動による協働学習(祭りの効果—仮説モデルの検証—	発表者たちは Oral Presentation and Performance (OPP)という研究会を立ち上げ、複数大学の教員が年に一度の発表イベントを過去8年間にわたって実施してきた。その目的は英語学習者にオーセンティックな発表の場を提供するとともに、教師側はオーラル・プレゼンテーションに関わる指導技能を高めることである。端的に言えば、これは協働学習を基盤とする学習活動であるが、OPPの指導効果を検証するために、2014年度はOPP参加者を対象にアンケート調査を実施し、OPPの指導効果を理論的に説明するための仮説モデルを作成した。2015年度は、さらにこれを発展させ、このモデルの妥当性を検証する目的から半構造化面接の手法を用いて、参加者のうち12名を対象に面接調査を実施した。本研究発表では、この面接による学生の発話を紹介しながら、上述の仮説モデルについて考察した結果を発表する。
(9)	研究	中	指導法	清田 洋一(明星大学), 松津 英恵(東京学芸大学附属竹早中学校)	学びのプロセスを重視した英語学習ポートフォリオの開発—中学校での取り組み—	本発表では、自律的な英語学習を支援する個人用ツールとして、学習ポートフォリオ、My Learning Mate(以下、MLM)を提案する。MLMは、学習者が自分の言語学習を記録し、生涯学習的な観点から、その学習内容を自分自身で振り返ることを支援するツールである。さらに重要な点は、学びの結果だけに注目するのではなく、どのように学んでいくのかというプロセスを重視することにある。それによって、「教師から生徒へ知識の伝達」という一方的な流れを見直し、教師と生徒が連携して、それぞれの学習環境に適した英語学習へと改善できる可能性がある。MLMはこれまで高等学校での取り組みを中心に開発を進めてきたが、今回は中学校での取り組みに焦点を当てる。中学校では教科として本格的に取り組む最初の英語学習となる。その意味で、学習者の自律的な態度を涵養することが、その後の自発的な英語学習の継続性の大きな鍵となる。

第2日目(8月21日) 午前 第23室(516) (8) 9:30 (9) 10:00

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(8)	研究	大	動機	三上 由香(大阪商業大学)	多読活動における目標設定の活用と効果に関する質的研究	本研究においては、大学英語授業に目標設定を取り入れた多読活動を導入し、質的データを用いて、目標設定が学習者の動機づけに与える影響について広く深く探ることとする。具体的な研究課題は、(1)学習者がどのように目標を設定していたのか、(2)目標設定はどのように活用され、どのような効果をもたらしたのかを明らかにすることである。この多読活動では、学生は自ら目標を設定して、その達成に向けて努力することが求められた。参加者として4名の学生を選出し、半構造化インタビューを中心としたデータの収集を行った。Miles, Huberman and Saldana (2014)に基づくデータ分析の結果、多読実施期間を通じて設定する目標は変化していることがわかった。また、4名の学生全員が、目標を達成できた時に達成感を感じていること、目標を基準として活用し進歩を実感していることなどが明らかになった。一方で、目標を達成した後、意欲が減退する学生も見られた。
(9)	研究	大	動機	川井 一枝(いわき明星大学)	チャンツによる音読指導は大学生のWTCに影響を及ぼすかーリメディア教育の視点からー	チャンツは英語リズム指導の一つとして広く認識され、公立小学校の外国語活動でも多用されている。期待される効果としては、発音能力やリスニング能力の向上などの他、学習意欲を向上させる点等があげられる。本発表では、チャンツの学習意欲を向上させる情意的な部分に着目して、チャンツを用いた音読指導がリメディア教育を必要とする大学生のWTCに影響を及ぼすかどうかについて検証した結果について報告する。地方の私立大学1年生を対象にチャンツを用いた音読指導を8週間行い、国際的志向性や外国語教室不安の尺度、L1WTCとL2WTCのスケール、チャンツに関する質問紙(自由記述含む)調査の結果を分析した。結果、国際的志向性とL2WTC、国際的志向性とチャンツの得点間にそれぞれ有意な相関が見られた。被験者数が少ないため追試が必要ではあるが、チャンツによる音読指導は彼らのWTCに肯定的な影響を与えたことが概ね確認された。

第2日目(8月21日) 午前 第24室(517) (8) 9:30 (9) 10:00

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(8)	研究	大	特別支援	Leis, Adrian (宮城教育大学)	Anxiety and the use of closed captions in listening tests for deaf and hard-of-hearing university students	The importance of providing equal opportunities for all students has been underlined in recent years with an increasing number of students who have some kind of disability attending university. In 2012, MEXT decreed that all educational institutions provide equal opportunities for students with disabilities to receive the same quality of academic instruction as able students (MEXT, 2012). In this presentation, I discuss the testing of listening skills of Deaf and Hard-of-hearing (DHH) students in an EFL environment. I compare two methods: 1) Presenting closed captions in a scrolling manner, and 2) Presenting closed captions in intonation phrases (IP). I aimed to gain a deeper understanding of the following research questions: RQ1: Does a passage presented in IPs reflect the rhythm of English spoken by native speakers? RQ2: Do DHH students feel less anxiety when reading a passage in IPs than a passage presented without IPs? RQ1 was conducted with a total of 59 subjects all of whom had full hearing ability. Results indicated that closed captions presented in IPs did indeed reflect spoken English significantly more than the scrolling method. RQ 2 was conducted through interviews and listening tests with five DHH students. Anxiety was measured by recording spikes and dips in participants' heart rates throughout the tests. Patterns of heart rates and participants' opinions suggested presenting closed captions in IPs resulted in lower anxiety and thus higher performance in the tests. This presentation concludes with pedagogical implications to allow DHH students to integrate smoothly into regular classrooms.
(9)	研究	中	特別支援	中村 洋 (北海道ニセコ町立ニセコ中学校), 山下純一 (函館工業高等専門学校)	ユニバーサルデザインの視点を 取り入れた英語授業の考察	通常学級の中にも広汎性発達障がいやLDなどを抱えた児童・生徒が、診断の有無に関わらず6%ほどいるといわれている。そのような児童・生徒たちは、なんらかの困り感を持っているが、それに気付かれないまま、特段の支援を受けずに授業を受けていることも少なくはない。そういった児童・生徒たちの学習への困難さを少しでも取り除くために、ユニバーサルデザインの視点を授業に取り入れることは有効であると考えられる。本研究では、全国の小学校、中学校、高等学校の英語担当の教員を対象としたアンケート調査を実施し、日頃の英語の授業でどのような工夫を行っているのか、また、困り感を抱えている児童・生徒に対しどのような配慮を行っているのかを調査した。

第2日目(8月21日) 午前 第25室(519) (8) 9:30 (9) 10:00

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(8)	研究	大	文化	Masayuki Kato (神戸大学)	A Rhetorical Reading of Two Debates: Quirk, Kachru, Hiraizumi and Watanabe	This presentation will explore the ideological implications found in two debates conducted in different periods in different countries, but somehow in the same vein. One is what is called the English Today debate between Quirk and Kachru in early 1990s and the other is a series of debate conducted by Wataru Hiraizumi and Shoichi Watanabe, concerning with the English education in Japan in mid-1970s. Both debates are so different in time, place and contended points as to seem to be foreign to each other in the nature at a first glance: the former dealt with the“deficit-creativity”viewpoint towards non-native speakers’Englishes, and the latter focused on the instrumental/ cultural aspects of English usage, each contender tried to support in Japan. Still the shared rationale these two events carry would reveal itself through the rhetorical analysis which sheds light on the ideological aspects of the debates. I will start with the brief survey of the two discussion, and try to detect the political connotations shared by discussants (that is, conservatism and liberalism). It will be expected that some, hitherto unrevealed, aspect would come to light such as the alignment of pairs of Kachru and Hiraizumi, and Quirk and Watanabe.
(9)	研究	大	教員	James M. Hall (岩手大学)	Research Methodology used in an Ethnographic Investigation on Novice English Teacher Development	The researcher conducted an 18-month ethnographic study of three novice junior high school English teachers in Japan. This research focused on the instructional dilemmas experienced by novice teachers and the implications resolving these dilemmas had on their development. One common criticism about qualitative research is that the methodology is not transparent. The purpose of this talk is to present the various data collection procedures and analytical tools I used to demonstrate the methodological options available. First, I will give an overview of the ontological and epistemological foundations of the methodology, social constructivism and linguistic ethnography. Second, I will introduce the three teachers who participated in the study and discuss the ethical considerations made to ensure the study would not compromise them in any way. Next, I will review the research on the two methods of data collection, ethnographic interviews and participant observation, and discuss the procedures followed for this study. After that, I will discuss how I used the transcription software Transana to prepare the data for analysis. To analyze the interview data, I used methods from applied thematic analysis. I will show the procedures followed for coding the interviews in NVivo and present an overview of the main codes generated. Lastly, I will show how the participant observation data was segmented and used to perform a microanalysis of how the dilemmas elucidated by the teachers in their interviews were experienced in the classroom. This presentation is suitable for those interested in practical examples of methodology in qualitative research.



**第2日目(8月21日) 午前 E-205 10:30~12:00**

ワークショップ1	質的研究入門	講師:高木 亜希子(青山学院大学)
----------	--------	-------------------

**第2日目(8月21日) 午前 E-201 10:30~12:00**

ワークショップ2	中学校入門期の英語指導 - 中学校1, 2年の指導が自立学習を育てる -	講師:田口 徹(東京都千代田区立九段中等教育学校)
----------	---	---------------------------

**第2日目(8月21日) 午前 E-202 10:30~12:00**

関東甲信越特別企画 ワークショップ1	I Love Stories, Therefore I Love English	講師: Isabel Chang (ELT Expert & Teacher Trainer at Taipei City) 司会:折原俊一(千葉大学教育学部附属小学校)
-----------------------	--	--

**第2日目(8月21日) 午前 E-101 10:30~12:00**

関東甲信越特別企画 ワークショップ2	ConCLIL (CLILと共に) - 教員養成への活用・海外と日本の学校での実践 -	講師: 柏木賀津子(大阪教育大学) 司会:安達理恵(愛知大学)
-----------------------	--	------------------------------------

**第2日目(8月21日) 午前 E-206 10:30~12:00**

関東甲信越特別企画 ワークショップ3	量的研究の最前線 - ベイズ統計とデータマイニング -	講師: 草薙邦広(広島大学), 石井雄隆(早稲田大学) 司会: 山本長紀(木更津工業高等専門学校)
-----------------------	-----------------------------	--

**第2日目(8月21日) 午前・午後 ポスター発表(ポスター会場 5F) 11:00~13:55**

※要旨は初日の午後のポスター発表の部分をごらんください。